どこかの世界の愚かな人

tomato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どこかの世界の愚かな人

【Ｎコード】
Ｎ７８５０Ｙ

【作者名】
ｔｏｍａｔｏ

【あらすじ】
悲しからんものいとこころにくし。

とある憑依した1話

『評価されない人』

他人を評価できない人間が自分を評価してもらえないと憤るのは滑稽なものであろう。

その人は他人に自分が嫌われている理由が分からない、なぜなら自分以外の人間を自分以下と考えているからだ。

他人を評価できない人間がその人に評価してもらおうと思うのは甚だおかしい話である、他人に敬意を払えない人間が他人から敬意を払ってもらえないのは当然である。

僕の友人と思っているO君やS君でさえ人間性としても頭の良さから言っても僕より上なのだろう、だから私は彼らに敬意を払う、だから彼らと友人でいられるのだ、彼らに評価してもらえるのだ。

ふむ…果たして私の手を掴んで無理やり引っ張るこの御仁は誰なのか？

唐突に目覚めた意識、いまだ混濁中、されど周りを見渡すが見覚えのない場所ばかりだ。

どうやら高級マンションの渡り廊下らしい、私の手を掴んでいるふくよかな、悪く言えば太っている男性はこちらが痛くなるレベルで私を引っ張ている。

しかし太っていると言ってもこの男背が高い私は身長は高いほうだと思っていたが二倍もの慎重さがあるとはいやはや私が子供のようではないか。

「……？」

先ほど通り過ぎた消火器の大きさに疑問を覚えた、大きい、しかも私よりは大きくないがかなりの大きさだ。

なるほど、体を見ると見覚えのない可愛らしい服装になっていた、靴も女の子が着るような服に…ここまで考察すれば後は簡単なもの、どうしてかは分からないが私は憑依したらしい？

何が「なるほど」なのかは分からないが。

確か、最後の記憶は大学から帰って自室で寝たはずだったのだが…世の中とは不思議なことがあるものだ。

ところでさっきから私の手を強く引っ張るこの男性は誰であろうか、自分が子供、それも小学生程度の背丈と言うことから考えると保護

者か兄だろうか？

しかし背中しか見えないこの太った男には人への配慮も慈しみも見えないことからその線はないだろう。

斜め後ろから見える男は口元を歪ませブツブツと呟いている。

「犯す、ぉ犯してやる、僕はやっちやるんだ、ぼ僕は弱虫じゃない童貞どもめ、どうだ、ぅらやましいだろ…」

何とわかりやすい、夢ではなかろうかと言うほどの典型的と言うか浅はかと言うか、いっそ夢であってくれと思うほどにつまらない男だ。

男が立ち止りパツパツのゴムのズボンから鍵を取り出そうとしていた、その間も手は握ったままで汗と肉質が気持ち悪い、暇だったので観察していると分かったのだがズボンの股間部分が少しだけもっこりとしていた。

なるほど興奮している、これからのお楽しみに興奮と言うわけだ。

鍵を取り出した男が鈍臭い動きで扉の鍵を開け私を先に入れようとする、そこでむしろ私は踏込一気に走り抜ける。

「あ、おい！！」

ぬるりと汗で蒸れていた手と手は簡単に外れ私は土足のまま肥った男の部屋に入っていった。

まず台所を探した、包丁を探すためだ、いくら他人の体とはいえ中身は私なのだ、好きにさせるわけにはいかない、この子の後の一生はとても残念だがそうせざるを得ない。

暖簾の懸けてあった場所をくぐるとキッチンがあり食器乾燥機に包丁が入っていた、もう何日もそのままなのか埃をかぶっていて周りを見ればカップラーメンや焼きそばの白い…あれだ、あれ白いあの発泡スチロール、

「的なもの…か？」

何か違う気もしたが足音がしたので集中することにした、このまま暖簾をくぐったら擦れ違い際に腹を横に切って驚いている間に深く突き刺して留めをさそう。
こっちに来なかったら後ろから一突きにしよう、男の脂肪のある体と自分の体格を思い出して少しプランを変える、そうだ刺すなら急所を刺そう。

「何処かなぁ僕の雌奴隷ちゃん！出てこいよぉ！」

さっきまでブツブツ呟いていたのが嘘のように元気な太った…デブ、もう面倒デブでいいや。

これが世に言う内弁慶と言うやつか？

「かくれんぼかなぁ？どこかなぁ」

お腹がつっかえて机も覗けないとは、今は女だが元男としてちょっと可哀想になる、息も上がってるし、それは体力じゃなくて興奮からだと思いたい。

デブがとった行動は後者、つまり背を向けた、なので後ろから突き刺すことにした。

「どこだ雌豚ぁ！」

おいおい、豚はどっちだよ、と思いつつ走り出すとさすがにそこまで馬鹿ではないのでこちらを振り向く、でも遅すぎだ。

「ぎゃあああああああ！？」

包丁がデブの膀胱に突き刺さっている、刺さった部分から血と小便と黄色い脂肪が普通に出てきた、別にそこまで勢いも強くなかったので少し面白くなかったがまだ殺していないので油断はしないことにする。

「あ、あああ！！」

取り敢えずそこにあったニッパーを拾って鳩尾から包丁が刺さっている所まで脂肪を切り取る気持ちで引き裂いた。

思いのほか簡単に切れたが脂肪の上に自分の力では思いのほか致命傷にはなりにくく少量の血が顔にかかり引き裂いたところから黄色い粒粒、脂肪が顔をのぞかせる。

「おぉ～」

痛みで体をのけぞらせて倒れこむデブ、プラモやプラスチックの破片を巻き込んで倒れていてとても痛そうだ、土足で入ったのは正解だった。

「いだあぁあああ！ぎゃああ！」

「煩いなぁ」

誰かがここに来るのも嫌なので殺すことにする、昔本で見た洋ナシ型肥満体系とやらのこの太った男性、胸は脂肪が少なく振り下ろせばニッパーで倒せそう。

と言うことで振り下ろす、ちょうど胸の真ん中なので心臓ではないが十分死ぬだろう、また血が飛んで私の頬についた、生暖かった。

洗面台で顔を洗う、赤い血が水に流れて消えていく。

顔を上げて鏡を見ると可愛い、それも美少女と言う部類のロリコンが見たら放っておかない女性が存在していた。

服を脱いで血を洗い落としていたので上半身タンクトップ一枚で桜色の綺麗なあれが見え隠れしていて興奮する、立つ物はもうないが。

「なるほどあれが誘拐しそうになるのも分かる気がするな」

ちらりと洗面所の空いたドアから外を見るとすでに事切れたデブが死んでいた。

鏡に目をもどすと鏡の中の美少女もこちらを見る。

「はぁ、マジかぁ…」

頭を抱えると美少女も頭を抱える。

どうするかな…。

「取り敢えず身元が分かるようなものはないし…」

あー、どうすっかなー。

「とりあえず部屋を散策してみるか」

こうなったらしたいことは全部しておこう。

そう思い立ちまだ見ていない部屋を我が物顔でまたぐ、当然靴は履いたままだ。

「お邪魔しまーす」

部屋に入ると一番最初に机の上にパソコンがデデンと存在感を主張しており近くで見るとマウスに白い垢みたいなものがこびり付いていた、オッパイパッドなんて買う人いたのか。

「プラモかぁ〜、プラモねぇ」

先ほどニッパーとその他部品が落ちてたからプラモがあることは想像していたがいい方向で予想が当たった。

「戦争物が好きだったのかな?」

ガンダムもそうだがあのデブ、体外である、節操なくプラモを集めている、作っていないものをもあることから途中で止めたのだろう。物は大切にしない派なのか埃と傷が目立つ。
でも基本は戦争物らしく私の考えていたものもありそうだ。

「ふむ、何処だろうか…」

あったらあったでいいのだが…探すのも手間だ。
埃のかぶっていない机の引き出しとかどうだろう？

「一段目…見なかったことにしよう」

ああ、うん厨二病って誰にでもあることだヨ、気にしないヨ。

「二段目…鍵か、ぶっ壊す」

道具箱に入っていたバールで無理やり開けるとそこにはお目当てのものが。

「コンバットナイフげっとぉ」

鼻歌交じりに動物の皮で出来た鞘からその刀身を抜き出す、包丁とは違い持ちやすく、護身用にはぴったりだった。
いやはや人を厨二病などと称したが自分も人のことは言えない立場になってしまった。

「後は金だな…」

以前の使用者の重量に草臥れてしまった腰掛椅子はキィキィと動かすたびに悲鳴を上げる、私は銀色に光るナイフをクルクルと弄んだ

後、元の鞘に戻しベルトに付ける用の補助道具ごとリビングに運んだ。

外はもう真っ暗だった、部屋を出るとき時刻を確認すると夜中の3時だったが全く眠くない、むしろ変な焦燥感が私を追い回す。

名前…なんだっけな…

少女の名前のことではない、自分の名前のことだ、そこだけがぼんやりとしていてよく分からない、まぁテンプレテンプレと自分に納得させ歩き出す…

歩く…どこへ？…どこかへ…目的は？…ない…ただぼんやりとここにいても助けが来ないと思った。

とある憑依した2話

『感情がある人』

僕は感情がありません、いえ、間違えました感情はあります、でも感じないんです。

他人が成功しました、喜びます、でも喜んでません、見せかけだけの張りぼてです。

彼女が出来ました、彼女は僕とは上手くいっているのでしょうか？相手の感情が分かりません。

キスをしました、ファーストキスだそうです、よく分かりませんが、大切なものなのでしょう。

死にました、涙は出てきません、でも、横に誰もいません、よく分かりません。

墓参りに行きました、死のうかと思いました、でも理由が思いつきません、世に言う後追い自殺ですが悲しいと思わないのでどうしようかと思います。

お腹が痛いです、刺されました、赤いです、分からないです、最後まで、涙が、出無いんでしょ、うか？

「何で泣いているの？」

誰が泣いているのでしょうか？

「ふむ、お金がなくなりそうだ…どうしようか…」

このままでは生命の危機どころか、この話が終わってしまう、おっと、そういう話はダメだったか？

「所でここはどこなんだろうな？」

私はあの後お金を崩しながら右へ左へふらふらと放浪していた、憑依だか何だか知らないが私以外にオカルト、つまり妖怪とか神的な何かとかそういったものは何一つ見当たらない、いまだに自分の名前も分からない。

「どうしたものか…」

この娘の親は捜索願を出していないのか、まったくそういった兆しがない。

ここがどこかは忘れてしまったが、都市開発の進んだ町である、そこの繁華街に私は今いる。

「取り敢えず、ラーメンでも食べようかな」

私の目の前には美味しそうなラーメン屋さんが建っていた。

醤油のいい匂いが私の腹を刺激し腹が鳴った、ちょうどお昼だしここで食べることにしよう。

やれやれ、お金は後で考えよう、そうしよう。

「醤油ラーメン一つお願いしまーす」

椅子に座って人のよさそうなおじさんに頼む。

「はーい！醤油一つね！」

この体は何とか一人で食事処に入っても声をかけられない、胸は小さいが背は大きいのが幸いした。

といっても机より頭二つほど大きいだけだが…自分で言って悲しくなってきた。

「醤油ラーメンお持ちしましたー」

赤いどんぶりに入ったラーメンから醤油のいい匂いがする、美味しそうだ。

「はふはふ」

おお、どんぶりが熱いから汁もラーメンも超熱い、こういうのは初めてだな…熱くて上手い、麺が太いのが少しあれだがそれは人それぞれと言うモノだな。

『〇〇市で起こった殺人事件ですが犯人はいまだ消息は掴めておらず、警察は被害者の知人の怨恨の線で捜査を進めています』

「んにょ？」

物騒なことだ…思わず箸を置きテレビを見つめる、若いお姉さんがハキハキと情報を提出していく。

『被害者の緒方さんですが、最初の発見者の緒方さんの母親が見た時、緒方さんは全身を5～6回刺されて死んでいました、今日はこの事件について〇〇大学の犯罪心理学教授の近衛氏をお呼びしました』

テレビを見ると頭部が剥げているオジサンがスーツを着て偉そうに喋っている。

『警察は怨恨の線で捜査を展開していますがこのことについてどう思いますか？』

『ふーむ、その線は濃いでしょうな』

ふむ、このオジサン私と同じ口癖を…むぅ。

『どうしででしょうか？』

『被害者は喉から腹部をかけて何度も刺されていてそして股間の部分を包丁で深く刺されています、これはかなり恨みがあった人間の犯行と思われます』

「うーむ、怖いことをする女性もいるものだ」

なんだか既視感を感じるが…。

『しかし被害者の宅からは３０万円相当のお金とバックなどが盗まれているらしいですが』

『物取りの犯行に見せたかったのか、どうしても金が必要な状況だったのか…どちらにしてもこれからの詳しい警察の調査で分かっていくでしょう』

その他一切のことは分かりません！ってやつですね分かります。

『はぁ…そうですか、貴重な意見ありがとうございました』

そして画面が変わり殺された男の写真が写る。

「あ、あいつか」

そこには私が殺した男が写っていた。

取り敢えず麺が伸びるから食べよう。

「うーん……っと」

大きく背伸びして日差しを浴びる、口が臭い、今日は銭湯見つかるだろうか？

出来れば健康ランドがいいなぁ。

それよりもお金がないのをどうにかしたいな。

「ふむ、援交でもするか？」

何をバカなことを、と額を押さえて低く笑う、この小さな身では引

っ掛かる客もいないだろう、あの男みたいな存在は考えたくないが。

「どうするかな、っと」

フラフラと歩きまわり、ポールを綱渡りし、石橋の端を歩いて渡り、子供だからかは知らないがとても身体能力が上がった、鬼ごっこでは誰にも負けないだろう。

「おお、公園だ、公園じゃないか、公園行こうか？いや行くべきだろう」

ん、これは反語じゃないな？まぁいいか、道路に面した人気のない公園を見つける、ここで遊ぼうか。

公園の遊具で何が好きかと言ったらそりゃぁブランコだろう、ブランコほど時間を潰せるものはないだろう。

「よ…ほっ…うりゃっ…しょっ」

ブランコの乗り方は言うまでもない、引いて押して引いて押してだ、それをするたびに少し出るお腹が可愛らしい、ふ、私は何を言っているのか、少し黙ろう。

次第に大きくなるブランコ、今の格好は茶色の縦セーターに短いスカートなので見えてしまうな、ああ、ついでに白だ、ん？聞いていなかったか、すまん。

「…つりゃっ！」

体重の関係上仕方がなくシートが半円を描くほどで限界が近づきそ

こから飛び降りる。

しまった、下じゃなくて上に飛んでしまった。

私の体は空中で一回転して視界が空色と緑色と茶色と黒色で目まぐるしく変わる……黒？

トス、柔らかいものが受け止められる音と自分の体に走った軽い衝撃で驚いた。

黒髪を掻き揚げ固めてやくざ面した男が私を見下ろしている。

彼が私を受け止めてくれたらしい。

「ありがとう」

「！？」

私が感謝の言葉を言うと心底驚いたという風に私をまじまじと見てくるヤンキー、きっと感謝されることになれていないのだろう、そうだろう。

「ところで」

「なんだ？」

「その顔は人さらいか何かかね？」

「お前…アホだな」

この反応と見るにただのヤンキーと言うわけでもなさそうだ、変態っぽいけど。

「ほほぅ、アホとな、何をもって私をアホと評するのか理由を要求するよ」

「普通泣くか騒ぐくらいするだろ、というよりそう見えるんだったら言わないだろ？」

「ふ、それこそ阿呆だな、私は見た目で人は判断しない…多分」

それに中身が子供じゃないからね、君ごときはもう怖くないさ、いろんなことがありすぎたよ。

「多分か？」

「誰だってレイプ魔に近寄りたくないだろ？だから多分なのさ」

「まぁ…そうなのか？」

「そんなものさレイプ魔さん」

ニヤリと笑うとそんなことを言われるとも思わなかったらしい男は驚き口を開ける。

「んなぁっ！？」

間抜けた声と共に驚きで腕の力が弛み私は身を捩り地面に着地して一端彼我の距離を取る。

「どうして俺がレイプ魔なんだ！」

「ふむ、レイプ魔じゃないと主張するかね？べたべたと触っておきながら、このスケベー」

体を抱く振りをして身をくねらせる、ロリコンはこれで顔を赤くする、こいつはどうかな？

「おいこら大人をあまりからかうんじゃないぞ？」

にこやかに笑う彼、くく、確かに子供が見たら泣くな、それにロリコンじゃないらしい。

「ふふ、２１歳なんてまだまだ若造さ」

「なんで知ってるんだよ…」

「勘だ」

（２１）的な感じで言ってみたんだがあってるとはな。

「ところで２１歳の若造が私に何か用があるのかい？」

「用も何もこんな時間に子供がうろつくもんじゃないだろう、まだ学校の時間だろ？」

「さぁどうかなぁ、もしかしたら早めに学校が終わったのかもしれないよ？というより君の風体を鏡で再確認してからもう一度その言葉を吐くんだね」

「うっせぇ、顔は元からだ、それだったらお前以外の子供がいるだろ」

「ふむ、君は実に面倒くさい性格だね、でも馬鹿でもないし、そこまで不良でもないらしい」

「おいこら」

無視してバックを置いてあったベンチに座る、ブレ〇ケアは飲んでおいたから大丈夫、臭くない…多分、つい気にしてしまい息の匂いを確認する私、ふむ、臭い。

もう一個ブレス〇アを飲む、ラーメンはダメだったか。

「お前、人に嫌われるタイプだろ？」

私のあまりの物言いにジト目になる。

「さぁ、どうかな？人にもよるさ」

誰にだってこの口調なわけじゃない。

「ジュース飲むかい？」

カバンから出したヤクルトを進める、乳酸菌、きっとあれが膨れるはず乳だけに…すまない面白くなかったな。

「お、おう？」

私から受け取ったヤクルトを普通に飲み始めるヤンキー、こいつ面

白いな。

「……」

「……」

二人の間をしばらく無言が占める。

「なぁ」

「ふむ、何かな？」

「お前虐められてんの？」

「ふーむ……」

確かにそうとも取れるな、でもこの場合誰に虐められていることになるのだろうか？神様は訴えられるだろうか？

「まぁ……虐められてると言えば虐められてるかな？」

「やっぱりか、なら俺が助けてやるよ」

「ほほぅ、それが漢気とやらかね？それとも人さらいの甘い言葉かね？」

「なわけねぇだろうが、俺はまだ犯罪者にはなりたくねー」

私は犯罪者だがね、それでもいいというのなら。

「そうか、なら家に泊まらせてほしい」

ちょうど家がなくて困ってたんだ、しばらく泊めてもらおうではないか。

「え？」

「え？」

助けてくれないのかね？

とある憑依した3話

『愛する人』

他人を愛するとはどういうことであろうか、人は愛と言う言葉をどうも難しく考えるようである。

自分の愛する人を思い浮かべてみた、お世辞にも誰よりかわいいとは言えないが、私の理想とする人であることは確かである。

理想、これこそ浮気の原因であろう、理想とは変化するもの、上がるもの、際限のないものだ。

全くもって愛とは難しくはない、むしろ簡単である、まぁその後が大変であることは誰でもわかることだが。

『愛は不変である』誰が言った言葉だろうか？そんなことは無いと思うが。

『愛と欲は違う』これも誰かが言った言葉だ、私からしたらどちらも変わらないと思うが。

私が思うに『愛』とは『理想』だと思う、何故なら自分の理想を愛せない人などいないのだから。

「ほぅ…これはなかなか…」

いい家だ、彼以外誰もいないのかね？

それにしても一戸建てとは意外と金持ちだな、ちっ、ブルジョワジーめ。

「あーまぁ、なんだ？上がるか？」

面倒くさそうに頭を掻いて言う彼、掻き上げていた髪はボサボサになり彼は少しだけ友好的な顔になった。

「本当に襲わないだろうね？」

私は身を抱いて疑問の視線を投げかけてみる。

「襲わねえよバーカ」

実は道中同じ質問を4，5回したのでもう面倒くさいといった体で答える彼。

「冗談だ、襲われても覚悟はできているさ」

殺す覚悟はね、そう心中で思いバックの中のナイフの感触を確かめ安堵する。

「……呆れてものもいえねぇ」

頭を抱える彼、まったく軟弱な奴だ、昨今の男子は弱くていけんな。

「それこそ何の冗談だい」

ズボンから鍵を取り出す彼は…んー、何というかデジャヴだね。

「ところで君これは何て読むんだい？」

扉の横の表札を眺めながら彼に疑問を問いかける。

金属製のプレートには『布袋』と書いてあった、読めぬ。

「ふふん、読めないのか？」

ほほぅ、それはなんだい？私への挑戦かい？

「う…んと、布袋（ぬのぶくろ）…いや違うな…布袋（ほてい）かな？」

語呂的にこっちのほうが良いな、ならきっとそうだろう、そうに違いない。

「おお、すげぇなぁ」

馬鹿にしないでもらいたいな。

「ふふん、こう見えても君より漢字はできるつもりだよ」

「へぇそりゃぁすごい」

信じていないな、まぁこの体じゃ仕方がない。

「ねぇ」

「ん、なんだ？」

「名前…君の下の名前は？」

玄関の鍵を開けてドアを開ける彼、彼の名前は？

「勇だ」

「勇、か…いい名前だね」

「ありがとよ、ガキに褒められても嬉しかねえけどな」

先に入ってしまった彼を追いかけて家にお邪魔する、綺麗だ、あの部屋とは違うな。

「ここには一人で？」

「いや、母親と父親がいるんだが二人とも旅行で滅多に帰ってこない」

何と言うテンプレ、この人間はあれだな、主人公ってやつだな、本当に面白い世界だ。

「ふむ、それはまぁ何というか、テンプレで」

「テンプレ？あーまぁ、そうだな」

「お願いだから襲わないでくれよ？」

「だから誰が襲うかっつーの、信じろよ」

いや、そんな強面信じろって言われもねー。

そいつは最初ブランコで遊んでいた。

腰まで届く黒い髪と上品そうな可愛らしい顔立ち。

周りには誰もいない、当然だまだお昼を過ぎた頃、そもそもこの公園に人なんて滅多に来ない。

だから俺も来たのに。

少女はブランコを漕いで何が楽しいのか笑っている、どうしたのだ

ろうか。

突然少女は手を離しブランコから飛び出す、空中で一回転、黒い髪が空中で弧を描く。

気が付けば飛び出していた、その子を受け止めなければいけない気がした。

彼女の体はお世辞にも軽いとは言えないけれど、重さなど全く気にならなかった。

「ありがとう」

「！？」

驚いた、心底、今までお礼を言われたことなんてほとんどない、本当にびっくりだ。

この後家に泊めてくれなど言うからもっと驚いた。

つい家に招き入れてしまったが大丈夫なのだろうか、犯罪じゃないのか？

「気持ち良かったよ、ありがとう」

「あ、ああ」

何を勘違いしている？風呂だよ馬鹿。体からラーメンの匂いが少ししたものでね。

何のことかわからない？嘘はよくないな。

「いやぁ、助かったよ、このままでは私は援助交際をする羽目になってたのでね」

「ぶっ」

勇が噴出して唾が飛ぶ、ああ汚い。

「汚いなぁ、唾はそこまで綺麗なものでもないんだよ？」

「いや、お前気にするところそこかよ」

そう言いながらティッシュで自分の出した唾を吹いていく、うぅむ、シュールだ。

「まぁ今更気にすることでもないだろう、分かってやっているよ」

「分かってんのかよ…ガキっぽくねぇな、いやむしろガキっぽいのか？」

「ふふ、ガキとは失礼な、私はガキじゃないよ」

「はいはい」

全く敬意を感じないな、駄目な奴だ。
勇が座っているソファに腰掛ける。

「何のゲームだい？」

ソファの前にある大きな液晶テレビでガンアクション系のゲームをやっている勇。

「ガンサバイバー」

「ふーん」

勇の横に座る、今着ている服は私よりかなり大きいが着れないわけでもない、ただ少し古い型なのか箪笥の匂いが染みついている。

「君には妹でもいるのかね？」

「姉貴がいた、それはお古だけどな」

ゲームの中の主人公がいったん停止し、また動き出す。

「いた……」

「まぁ気にするほどでもねぇよ」

「そうかい」

「ああ」

私は何か言うでもなく静かに彼の横で座ってテレビ画面を眺めている、主人公がナイフと銃で敵を殺している。

「名前…お前名前は？」

勇が私の名前を問いかけてくる、これは痛いことを聞かれたな。

「私の名前…」

本当に、誰だのだろうね、私は？
この娘ではないのは確かである、しかし確固たる確信もなく私であるとも言い難い、いやそもそも私とは誰なのだ？
いっそのこと魔法やら超能力やら超常の力があればこんな状況も受け入れられたものを。

「どうしたんだ？」

「ん…いや、なんでもないよ、名前だったかい？……君に教える必要があるのかな？」

「いや、お前だって俺に名前聞いたじゃん」

「ふむ、それとこれとは話が違うのでは？」

方や小学生、方や大人、襲われたら私はどうしようもない、まぁそんなことは関係なく名乗る名がないからなんだがね。

「ああ、そうかいそうかい、まぁお前の名前なんか知らなくてもいいか」

「ああそうだ必要ないな二人しかいないのだからおいとかお前でいいだろう、うんそうしよう、それがいい」

これは二人の間のルールだ、二人だけの、いつ決めたか？今だよ、今この時から。

勇に寄り掛かる、肩が彼の体にちょっと触れるだけ、そのぐらいの接触でも彼の熱は確かにあって、このあやふやな世界を正常に戻していく気がした。

狂ってしまいそうだ、もしかしたらもう狂っているかも。

安堵から眠気が襲ってきた、このまま寝てしまうのも悪くない、ああ、悪くない。

彼に寄り掛かりながら久しぶりの深い眠りを味わうことにしよう。

「おい」

彼が突然話しかけてきた、もう目蓋を開けていられない。

「なんだい？」

暗い視界の中で囁き聞こえた言葉は。

「お休み」

「……ああ、お休み」

愚かな勇者

誰にも俺は理解されない。

「勇者殿！」

「勇者様！」

周りの人間が俺を勇者と讃える、俺にそんな資格があるかわからない。

「勇者様どうかこの世界を救ってください」

いきなりこの世界来ていきなりこれとは・・・初対面の人間に何を言っているのだろう、気が狂ってる。

「・・・分かった、何をすればいい？」

俺を理解しないあの世界にいても仕方がなかったので今回のことには感謝している、だからこの願いを引き受けよう、俺に何かできるとは思わないが。

「魔王を、魔王を倒してください・・・どうかお願いします」

見目麗しい美姫が俺に頼み込む、この人は俺を理解できるのだろうか？

「別に頼まれるのならそうしよう、だが俺にそんな力があるとは思

えない」

「いえ、勇者様は強い魔力をお持ちです、それがあれば魔王にも勝てるでしょう」

ご都合主義バンザイといったところだな、まぁどうでもいいか、勝てる見込みがあるのならばそれでいい。

「そうか、では引き受けよう」

「ありがとうございます」

深く腰を折って謝礼をする美姫、周りの人間が慌てている、苦笑する、俺はそこまでの人間でもない。

「俺はそこまでお礼を言われる程の人間でもない」

「ですが・・・」

「それに俺はこの世界に来たばかりで右も左も分からない、けどあなたは上に立つ人間だということぐらいわかる、臣下の前でそういうことはしてはいけないんじゃないか？」

「それは・・・そうですが・・・」

周りの人間も同意するように首を縦に振る。

「・・・そうですね、分かりました、勇者様こちらへこの世界のことについてご説明します」

敬語を使うがあくまで姿勢は同等で、さすが上に立つ人間は違う、そこらへんは嫌味なまでに完璧だ。

遠巻きからこちらを見ていた赤い女騎士がこちらを訝しそうに見ていた、それが少し気になった。

ここの生活にも少し慣れた、剣の使い方と魔法について学び一ヶ月が経つ。

今日も日課の剣の練習をしている、最初に比べあまり進歩しているとは思えない。

「おい・・・」

後数週間するとここを出で行かなくてはならない、いつ行かないといけないのか分からなかったので日程を作ってくれたのはありがたい。

「おい貴様！聞いてるのか！おい！」

「ん・・・？なんだ？」

話しかけてきたのは召喚された時に訝しげな視線を向けてきた女騎士だった。

「ぐ、騎士を愚弄するか！？」

「いや、なんだそれ、新手のいじめか？」

たまにあることだ、あんな奴が魔王を倒せるのか？といった風の人間がよくいる、まあそれは当然のことだ、魔王に勝てなかったら誰も勝てないからな。

「ち、ちがうわ！」

「じゃあなんだよ」

剣を杖にして腰をかがめた老人のようにする。

「そんな剣で魔王に勝てるものか！」

「さぁ？どうかな？」

手に顎を載せる、まあ俺もこんな奴に敬意は払いたくないのである。

「ぐ！貴様ぁ！」

剣を抜いて切りつけてくる、当然切られるのは痛いので剣の腹で受

け止める。

「そんなに気になるなら試してみてよ？」

「いいだろう！」

「ほい、俺の勝ちね？」

騎士が剣を振る前に剣を相手の首元に置く。

「な、どうやって」

言われるまで気がつかなかったのか驚愕する騎士、ああ滑稽だ。

「これでいいか？」

「え・・・」

「俺はお前に勝ったからもう帰ってもいいよな？」

「あ、ああ・・・」

呆然とした騎士を置いて俺は城の中に向かう、ああつまらん。

「待ってくれ！」

「・・・なんだ？」

「私も、私も一緒に連れて行ってくれ！足は引っ張らない！いらなくなったら捨ててもいい！」

「分かった、勝手にすればいい」

「・・・本当にいいのか？」

「道案内は居た方がいいからな」

「道案内・・・はははっ、そうだな、道案内か・・・ははは」

何がツボにはまったのかは知らないがとりあえず美人は笑っても美しいとしておこう。

旅の道連れだとか、そういうことはどうでもいい、ただついてきたいのなら勝手にすればいい、魔王を殺せばいいだけの旅だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7850y/

どこかの世界の愚かな人

2011年12月11日23時45分発行